

# 南の風

Shaplaener  
since 1972

vol. 297  
2022. September

市民とともに、  
あゆみ続けた50年。



50周年  
特別号

50th  
Anniversary

# 市民とともに、あゆみ続けた50年。

シャプラニールの50年は、市民による海外協力を追求し、試行錯誤した50年でした。

「市民の力とつながりで、すべての人々がもつ豊かな可能性が開花する社会」に向かって

あゆんでこられたのは、これまでシャプラニールの活動にかかわってくださった南アジアと日本の皆さまがいたからです。

一緒に活動をする、すべての皆さまに感謝しながら、51年目も、新たな一歩を踏みだします。

これまででも、これからも、市民とともに——。



写真撮影 福澤 郁文

2022 2021 2015 2011 2009 2007 2006 2001 1997 1996 1984 1983 1980 1977 1974 1973 1972 1971

## バングラデシュ独立

バングラデシュ復興農業奉仕団派遣  
ヘルプ・バングラデシュ・コミュニティ(HBC)結成  
シャプラニールの前身団体

モノを配布する「援助」で失敗  
バングラデシュ事務所開設

女性による手工芸品生産組合活動開始  
フェアトレード活動のはじまり

ポイラ村の事務所が襲撃される

シヨミティ(相互扶助グループ)方式の支援開始

「シャプラニール市民による海外協力の会」へ改称  
第1回スタディツアー開催

第1回全国交流会(後の全国キャラバン)開催

ネパールでの活動開始

バングラデシュ事務所でストライキ発生

NPO法人化  
物品寄付「ステナイ生活」開始

家事使用人として働く少女支援開始

バングラデシュ・サイクロン「シドル」緊急支援  
住民主体の地域防災支援の取り組みへと発展

認定NPO法人格取得

東日本大震災被災地支援  
日本国内で初の活動を実施

ネパール大地震緊急救援・復興活動

在住外国人支援開始

シャプラニール創立50周年

## 50周年特別号

シャプラニールが活動を開始して50年が経ちました。創立記念日が9月1日であることから、本会報9月号を50周年特別号として、50周年にまつわるさまざまな記事を掲載しています。



表紙一部の撮影 福澤 郁文

## Contents

- 3 事務局からのメッセージ  
50年の感謝を込めて
- 4 特集1  
50周年特別企画! シャプラ若手座談会  
私たちがここにいる理由
- 9 特集2  
50周年記念インタビュー  
沖縄の今を考える  
～本土復帰50周年・子どもの貧困・多文化共生～
- 15 クラフトリンク  
50周年記念グッズ限定発売開始!
- 16 シャプラニールの創立50周年に寄せて
- 20 取材ルポ! 50周年記念動画が完成しました
- 22 とともに事業を行うパートナー団体からのメッセージ
- 25 ステナイ生活  
「あなたのはがきが、だれかのために。」キャンペーン報告
- 26 2022年度会員総会実施のご報告
- 27 お知らせ



「誰も取り残さない。」

社会のさまざまな制度や仕組みから取り残され、すべての人が持つ豊かな可能性が奪われてしまうことがあります。

私たちは人に寄り添い自らも当事者になることで社会課題の解決を進めています。

貧困のない社会の実現をめざして。

南の風 通巻297号(季刊)  
2022年9月1日発行

発行元 認定NPO法人  
シャプラニール=市民による海外協力の会  
発行人 坂口和隆  
編集長 小松豊明  
編集 下鳥舞佳 高階悠輔 長瀬桃子 宮原麻季  
デザイン 柴田篤元  
印刷 株式会社上毛印刷

東京事務所  
(火曜から土曜10:00~18:00/日曜、月曜、祝日定休)  
〒169-8611  
東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内  
TEL 03-3202-7863 FAX 03-3202-4593  
Email info@shaplaneer.org  
Web https://www.shaplaneer.org/

## シャプラニール創立50周年特設サイト

50年分の感謝を込めて、これまでの歴史を振り返るとともに、これからの未来を語るコンテンツをお届けしています。ぜひご覧ください。  
<https://www.shaplaneer.org/50th/>



## Q2 「市民による海外協力」って何だろう？

**高階** シャプラニールは団体名にただの海外協力ではなく「市民による海外協力」を掲げています。その意味を分かっているつもりでも、ふと「市民による」って何だろう？と思うことがあります。皆さんは「市民による海外協力」をどのように捉えていますか？



**峯** シャプラニールの表す「市民」とは、一人ひとりの市民というだけではなく「市民社会」を意味していると思います。「市民社会」は市民が声を上げ行動を起こすところであって、いろいろな分野の最前線に行くことができる力を持つもの。ただ実際



の業務にあたり、助成金を活用して事業を進めることもあるので、ある程度は制度の中で動かないといけないというジレンマがありますね。私は以前フランスの政府系の機関にいましたが、ODA（政府開発援助）は政治的な思惑も絡んできますし、柔軟に動くことが本当に難しい。動き出しまでにすごく時間がかかってしまいます。ありがたいことに、シャプラニールはご寄付などの自己資金があるので、特に緊急救援を実施するときなどは、組織独自の判断でフットワーク軽く開始することができています。

**下鳥** 本来、市民であるということは、どんな国のどんな人にも約束されたステータスです。「支援する側」「支援される側」という壁を壊してフラットにできる力が、市民という言葉には強く含まれているはず。私自身「かわいそうな人を助けたい」からこの世界に入ったわけではなく、同じ市民、同じ時代を生きている人に魅力

**菅野** 私は今の仕事を自分の親や親戚にうまく説明できていないんです。海外協力、ネパール、というような話をしてもすごく遠い世界の話と受け止められてしまう。でも、最近、叔母の職場にネパール出身の方が入ったそうで、それからは「生活で困っていることがあるみたいでなんとかしてあげたい」「シロップ漬けのドーナツみたいなものも買ったんだけど、これ何？」など話をすることが増えたんですよ。叔母にとって遠い存在だったネパールが急に生活に入ってきて、自分ごととしてネパールのこと、世界のことを捉えて動くようになってきた。これがまさに「市民による海外協力」だなと思うようになりました。海外に行ったかどうかに限らず、自分ごととして考えることができる人の輪を増やしていくということが「市民による海外協力」なのだと感じています。



## 50周年特別企画! シャプラ若手座談会 ~ 私たちがここにいる理由 ~

シャプラニールの若手職員が集い、これまでの自分、これからのシャプラニールについて座談会形式で語り合いました。シャプラニールが50周年を迎える今、日々、何を思い、何に向かって歩みを進めているのか。彼らの言葉と共に次のシャプラニールの形を考えてみませんか。

企画進行・インタビュー・文/高階 悠輔

**高階 悠輔**  
(たかしな ゆうすけ)

秋田県出身。学生時代にNGOでのインターンやアルバイトを経験。青少年団体での勤務を経て、2020年4月に入職。国内活動グループ・チーフ。



## Q1 自己紹介&わたしと「海外協力」との出会い



**菅野 冴花 (すがの さえか)**

群馬県出身。シャプラニールのスタディツアーで、それまで「途上国の人」だった存在が顔の見える「○○さん」に変わる経験をし、もっと人々の暮らしや文化のことを深く知りたいという思いから、大学卒業後、青年海外協力隊員としてネパールへ。その後、民間企業での勤務を経て、2019年6月に入職。ステナイ生活やネパール事業を担当し、現在は海外活動グループで在任外国人支援を担当。



**下鳥 舞佳 (しもとり まいか)**

千葉県出身。大学生時代、国籍や文化が異なる人との交流でアジアの国々の魅力に心をつかまれ、「大好きな国や人たちと一番いいかわり方ができる仕事を」という思いから海外協力の世界に飛び込む。大学卒業後、NGO職員やネパールで日本語教師として勤務し、2018年にシャプラニールで広報インターンとして活動。2021年7月に入職。広報グループでウェブサイト運営や広報制作物を担当。



**ダハル スディブ**

ネパール・シンドゥパルチョーク郡出身。東日本大震災への寄付を集めたことで日本を通じて海外を強く意識。その後も大学でボランティアクラブをつくり、募金や献血のイベントを行うなど社会活動に広く従事。日本の大学院を修了後に民間企業での勤務を経て、シャプラニールの活動に共感し力になりたいという思いから、2022年2月に入職。国内活動グループでステナイ生活を担当。



**峯 ヤエル (みね やえる)**

京都府出身。日本で高校を卒業後、フランスの大学で農学を学ぶ。その後、モザンビーク共和国で農村開発分野のインターンとして過ごすうちに海外協力にかかわりたいという気持ちがより強くなり、フランスの国際協力機関へ応募し、職員としてガーナ共和国での勤務を経験。2019年3月にシャプラニール入職。海外活動グループでバングラデシュ事業を担当。



感じて、一緒に何かしたいと思ったことがはじまりです。

こうした想いに共感できる人が集まってできた団体だからこそ、シャプラニールは人間味に溢れているなと感じますね。ただ「市民」という言葉には少し固さもあって、その人間味の部分をうまく表現できていない気がします。「人間による海外協力」：だとちよつと生々しすぎますが（笑）。もう少し伝わりやすい言葉を見つけないです。

続けることがシャプラニールの役目だと思っています。

**高階** 立場をフラットにするという意味合いでは、シャプラニールの大切にしている価値観の一つとして「援助しない」という言葉が出てきますよね。その一方で、例えば寄付を集めるときに「〇〇な状況が現地で起きています。ご寄付をお願いします」というように呼びかけることがよくあります。日本から南アジアへのやや一方通行な感じもしていて、本当に対等にできているのか不安に思うこともあるんです。

**下鳥** 支援という枠組みの中で完全に対等になるのは難しいかもしれません。ただ、それを自覚し、一方通行のかかり方にならないよう、現地の声に常に耳を傾け、対話を続けることが大切だと感じています。どんな立場の人も、豊かな可能性を持っているという点は共通しています。広報担当として現地の情報を伝える上で、抱えている課題の面ばかりではなく、人びとの持つパワー、魅力をきちんと伝えていくことを日々心がけています。

**峯** 文化交流のような形でもなんでも、日本にいる私たちが学ぶ立場になる機会を

### Q3

## シャプラニールの変えたいこと、 変えたくないこと？



**菅野** 2021年から新規事業として在住外国人支援の活動を進めていると「50年の歴史」が絶対に失敗できないぞ！というプレッシャーと感じてしまうことがあります。もちろん自由に活動ができないということではないのですが、たとえ失敗するかもしれないことでも、まずはやってみようという環境が常に欲しいですね。

**下鳥** 以前、設立から間もない団体でボランティアをしたとき「やってみてだめなら次！」という軽やかな姿勢をすごく感じました。シャプラニールは50年の歴史のなかで、経験、知見、つながりがほかの団体にはないくらい蓄積されていると思います。それがプレッシャーのように重い一つの塊としてのしかかるのではなく、それらを誰もが登りやすい階段のようにうまく積み上げて、高く飛ぶための未来へのステップとして生かしていけるといいと思います。

**高階** 新しい団体にはない知見やつながりは、シャプラニールに長くかかっている方は把握していても、私たちが知り尽くせ

ていないこともありますよね。会員、マンスリーサポーター、ボランティア、寄付者の方々とのつながりを生かしきれないことはすごくもったいない。私たちはたくさんつながりにアクセスする努力をもっとしなければいけないのだと思います。

**ダハル** 新しい事業にチャレンジしていくと新しい課題も生まれてきますよね。私たちは職員としても社会人としても経験は長くはないので、どうしても失敗は起きてしまっていると思います。歴史はもちろん大事ですが、私はもっと挑戦する環境に変えていきたい。これだけの支援者の方がいるのだから、もっと挑戦できる環境で、困った時にはアドバイスをもらいながら一緒に活動していきたいです。

それから変えたいことの一つに「事業を絞る」ということがあります。児童労働、地域防災、在住外国人支援、フェアトレードと多岐に渡る活動に取り組んでいます。いくつかの分野に絞ったほうが高い専門性を持つのもっと効果的な活動ができるのかもしれない。「困った時にアドバイ

もっと増やすことも大事なのではないでしょうか。地域防災の取り組みなども含めてですが、バングラデシユやネパールの人たちの地域社会のつながりや役割など、学ぶことはすごくたくさんあるはず。市民である私たち個人ももっと学ぶ姿勢をもって、活動地の人とかわかることが必要だと感じます。

**高階** お互いに学び合うという姿勢はやっぱり大切です。まだまだ私たちも現地のことを知らないですよ。想像でしかないのですが、近年はCOVID-19で実施ができていませんが、全国キャラバン（注）のような学び合いや語り合いの機会が以前はもっとあったのかもしれない。海外協力のプロフェッショナルとしての役割が求められ、そして活動が専門化していることで、そうした交流の場が少なくなってしまうのかもしれない。これは実際に事業を担う私たちにも責任があり、うまく両立させていきたいですね。

（注）シャプラニールの支援活動を、毎回異なるテーマで全国各地の市民に伝えるイベント。1984年の開催以降30回以上の開催、1万人以上が参加されている。

スをもたらう」場合も、ある程度分野を絞った方がアドバイスを求めやすいかもしれない。でも職員の育成は、専門的な知識を深めていくのか、総合的に経験を積むのか、判断が分かれると思いますけどね。

**下鳥** 私もそう思います。例えば、誰かが「児童労働」について調べたとき、専門的に取り組んでいる団体の方がやっぱり先に目につきますし、覚えてもらえる。手広い活動だと、せっかく素晴らしい活動を行っていることも認識してもらえないかもしれません。現地駐在員もさまざまな専門知識が必要になりますし、もう少し活動分野を絞って専門性を上げていくことに賛成です。

**峯** シャプラニールはこれまで分野ではなく、南アジアの文化や言語など、地域事情に詳しいという専門性を強みにしてきました。でも、そこまで一つの国や地域にこだわらなくても良いのかもしれない。例えばバングラデシユは、1972年の独立直後の状況とはもちろん全く違って、さらに5年前、1年前と比べても経済状況や生活環境などがどんどん変化をしている。私たちの活動地でもさまざまなスピードで変わっています。一度、日本のNGOとして現在の活動地にかかわる意

味を私たち自身が問い直す機会をつくってみたいのではないのでしょうか。

**下鳥** 一方で活動が多岐にわたるから、その魅力もありますよね。例えば、寄付だけではなく、フェアトレード商品を買ったり、ボランティアに参加したりと扉がたくさんあることで自分にあつたかわり方を見つけれられる。ボランティアの皆さんが本当の身内の甥っ子姪っ子のごとくのようにシャブラニールのことを話してくれるんです。団体名の通りベンガル語の「ニール」＝「家」の趣は変えないで残していきたい。また、さらに扉がオープンになって、簡易テントのような、どこにでも行けて、雨が降ったらみんながすっと入れる、そんな柔軟で軽やかな「家」のようになっていくといいなあと思います。

**高階** 今回の話を通じて、シャブラニールの市民団体としての価値、そして役割を改めて考えることができました。「市民」とのつながりを大切に、新たな視点も取り入れながら活動を進めていきたいと思います！

## 50周年記念インタビュー

# 沖縄の今を考える

## 本土復帰50周年・子どもの貧困・多文化共生

本特集では、シャブラニールの活動が始まった1972年に本土へ復帰した沖縄に焦点を当てます。シャブラニールはちょうど10年前（2012年）に沖縄平和賞を受賞した縁から、講演会「Peace & Democracy Forum」やイベントの開催など、少しずつですが沖縄とのかかわりを続けてきました。

今年5月に行われた沖縄復帰50周年記念式典で、玉城デニー知事は「本土復帰にあたり示された『沖縄を平和の島とする』という目標が達成されていない」と述べるとともに、「子どもの貧困など依然として克服すべき多くの課題が残されている」と、沖縄の現状について語りました。

本特集では、「平和」「多文化共生」「子どもの貧困」といったテーマを軸に、本土復帰50周年を迎えた沖縄で活動する方々へのインタビューを通し、沖縄の人々の想い、そしてシャブラニールの取り組みにもつながる沖縄の課題について考えます。

インタビュー／文 事務局長 小松 豊明



## これからのシャブラニールでやりたいことは？

**日本とネパールの架け橋になる！**  
文化や市民同士の交流やつながりをもっと強めていきたい。カフェのように誰もが集えて、気軽に話すことができる、気軽に海外協力にかかわれるような場をつくる。

**大好きなシャブラニールをもっと世界中に知ってほしい！**

海外のNGOや市民社会組織の国際的なイベントで登壇したり交流を深め、ゆくゆくは海外にも支援者の輪を広げたい。ボランティアとかかわり方や組織運営の在り方もなど、団体としての素晴らしさをもっと海外の人に伝えたい。

**支援者と活動の「つながりの見える化」！**

現地とのつながりや自分がやってきた活動が形に残って見え、関わることでやりがいや喜びを見つけられるように。シャブラニールをもっと「推したい！」と思ってもらえるようにする。

**やりたいことはたくさん！**

ボランティア、学校に行くのが辛くなってしまった子どもたち、子育てをする外国人の方など、誰でも集って話せるカフェのような事務所にしたい。ネパール駐在もしてみたい！



### インタビュー① 大仲 るみ子さん

**世** 界各国から多様な人々が集まる沖縄で、「多文化ネットワークふふ！沖縄」代表として多文化共生の活動を進める大仲さんに、本土復帰50周年を迎えた沖縄の人々の感覚、沖縄における多文化共生の現状などについて話を伺いました。

**fuふ！の多文化共生**

**小松** まず「fuふ！沖縄」について教えてください。名前の由来は？

**大仲** どういう意味だと思いますか？

**小松** そうですね…。fは「fun」のfとかでしようか。

**大仲** その通りです！楽しいことは「f」から始まるんですね。funとfairを大切に活動しよう、とみんなで話し合っ

た。多文化共生と一口に言ってもいろんな意味合いがある中で、私たちはまず、対等ではない関係性、楽しくないコミュニケーションがあることを認識し、そこを変えていくことが多文化共生であると捉えています。多様性を表すよう、英語とひらがなをミックスした名前にしました。

**ゆんたくする場を**

**大仲** 活動を始めたきっかけは、2020年から始まった新型コロナウィルスの感染拡大下、地域に住む外国人市民（留学生、技能実習生含む）と日本人市民、学校側と学生との間に対等ではない関係性があると感じたことでした。国の制度の問題でもあり、私たちに大きなことはできない。そこで考えたのは、いろんな人がゆんたくする場をつくらう、ということでした。

**小松** 今「ゆんたく」とおっしゃいました。聞いたことのある言葉ですが、具体的にどういう意味でしょうか。



ネットワークミーティングの様子



ネットワークミーティングで現状を伝えるネパール人グループの代表

ないか。悲しいというか虚無感を感じました。それはなぜかという、テレビなどの報道で先人たちの生き様、復帰への運動などを見て、知ってはいけれど、切実には捉えていなかった気がしたからです。50周年の式典を見て、正直「何だこれは？」と思いました。形だけですよね。お金がもったいない。5年前に行われた復帰45周年式典に参加した時も悲しかったです。腑に落ちない感覚がありました。その時に「もっと知らないな」と思ったはずなのに、忘れていたんです。

50周年の式典の時に国歌斉唱があり、なぜか泣きたい気持ちになりました。私たちは何を聞かされているんだろう、と。国家統制の戦略が透けて見えた気がします。先人たちはこれに反対してきたのだろうが、それがまかり通っていて、私たちは沖繩のアイデンティティをどこかに置いてきてしまったのではないか。私の子どもの頃は卒業式で君が代を歌わなければならぬという文化はなくて、それを拒否する先生たちが戦っていたのですが。

### 実は話されていない

**小松** 本土復帰50周年をポジティブに捉えている人はいますか。

**大仲** それがですね、私の周りでは本土復帰に

**大仲** 気軽におしゃべりをする、という意味です。「ゆんたく、ひんたく」なんて言います。

**小松** なるほど。「ひんたく」は語呂合わせみたいなことですね。ありがとうございます。

**大仲** それで、那覇市の市民活動への助成プログラムを活用して在住外国人を対象としたアンケート調査とヒアリングを行い、432人から回答がありました。その結果を私たちだけで抱えるのではなく、いろんな人と共有しようとしてネットワークミーティングを開催しました。

入国管理局や市役所の職員、地域の団体の人たちなどに来てもらいました。その時に印象的だったのは、新型コロナウイルスの感染拡大1年目だったことから、留学生たちがアルバイトもできず、国にも帰れない、という困窮した状況を声高に訴えたことでした。その声を入管の職員もちゃんと聞いたわけです。留学生は、入管の役人には変なことと言えない、市役所には話をちゃんと聞いてもらえない、という固定観念をもっている。そうではなく、「言っていないだよ」「ちゃんと聞いてね」という場になったと思います。

先日、ネパール人の留学生が「本土ではネパール人の自殺が増えている。沖繩でも問題になるかもしれないから何かしたい」「新しく来る留学生に地域生活オリエンテーションをしたい」と

ついで話をする人はいないんですよ。みんな「複雑だね」で話が終わっちゃう。埼玉にいるふうふのメンバーから「沖繩どう？」とよく訊かれるのですが、本土で話されているその熱量が沖繩にはなかったなあ、と思います。それはなぜなのかを考えると、沖繩のことを知らないし目を背けて向き合っていないからではないかと。

琉球大学の我部(がぶ)さんという先生が新聞で、「自ら現状を変えなきゃならない」と語っていたのが、とてもしっくりきました。政府や本土のことよりも、自分たちが考え向き合いたいと何も変わらないんですよ。沖繩で暮らす私たち自身が、虐げられていること、それを諦めてしまっている、ということをちゃんとわかっていないと思うのです。

### 啐啄同時

**大仲** もうひとつ、今年は本土との関係性を捉え直すチャンスではないかということ。沖繩の問題をちゃんと考えようとする人が増えている気がします。啐啄同時(そったくどうじ)という言葉があります。ふ化しようとして卵の中でひながコンコンと殻をつつくと、親鳥が外から殻をつつくタイミングがぴったり合うとひなが生まれてくる、ということから、またとない好機であることを意味します。沖繩のことを一

と提案してきました。自分たちでこのように考えて取り組むのはいいなあと思ひ、一緒にやろうかと話しています。

**小松** すごくですね。先日、東京の日本語学校から「ネパール人の留学生が生活に困窮している」とSOSがあり、食料を届けたことがありました。確かに、充分稼ごこともできない留学生の生活課題は深刻かもしれません。

**大仲** 私たちは見つかった課題を解決することまではできません。市や社会福祉協議会、他団体などみんながつながって、コラボレーションで多文化共生を一緒につくっていければよいと考えています。

### 表面だけのウチナンチュ?

**小松** 本土復帰50周年を迎えて、沖繩の人々がそれをどのように受け止めているのか、周囲の人たちの声、メディアの論調、そして大仲さんご自身の想いなどをお聞かせください。

**大仲** うーん。複雑です。お祝いではないし…。まず、沖繩って何だろう、ということ突き付けられた気がします。何をもち「オキナワナンチュ」って言うのだろう。自分は表面だけのウチナンチュ(沖繩の人という意味)なのでは

緒に考えよう、という機運が生まれつつあるのではないのでしょうか。

**小松** この会報の読者、本土の市民へ何かメッセージはありますか？

**大仲** 気軽に会って話しましょう！でしょうか。色々聞きたいです。沖繩のことをどう思うのかとか。壁がなくなったらいいと思います。自分は壁を感じているわけではないんですけどね。ゆんたくしながら、難しい話も柔らかい話もできたらいいですね。



**大仲 るみ子(おおなか るみこ)**  
多文化ネットワークfuふ! 沖繩代表。沖繩出身、若手県で大学生活、初めての就職は北海道の小学校。県外、海外での暮らしや旅を経験。いろいろな地での出会いや学びが、現在の多文化共生の活動につながっている。元沖繩NGOセンター事務局長。2021年に開催したPeace & Democracy Forumの実行委員会メンバー。

## 本

土復帰50周年の記念式典では、玉城知事が子どもの貧困に言及したほか、子どもの貧困問題に取り組む若者のメッセージも届けられました。朝日新聞が沖縄タイムス、琉球朝日放送と合同で実施した県民調査でも子どもの貧困について質問し、必要な対策として「子どもの居場所支援」「ひとり親家庭の生活支援」「学習支援」などが挙げられています。

このように子どもの貧困が大きく取り上げられる状況を踏まえ、沖縄における子どもの貧困問題に長く関わり、子どもの貧困調査や『沖縄子どもの貧困白書(2017)』『沖縄子ども白書2022』の発刊に携わってきた、沖縄大学の山野さんに最近の研究内容を含め、お話を伺いました。

## 調査と白書

**小松** 2017年に発行、注目された『沖縄子どもの貧困白書』では、子どもの貧困問題と大学への進学状況、そして地域の社会的ネットワークの関連について書かれていました。特に社会的ネットワークと子どもの貧困問題のつながりについての分析は、それまであまり取り上げられていなかった視点を提供したのではない

かと思います。それから5年が経ち、『沖縄子ども白書2022』が刊行されようとしています(インタビュー時)。今回は書名から「貧困」がなくなっていますね。

**山野** 今回は、貧困だけではなく基地問題や虐待、DV問題などいろんな切り口で沖縄の課題を考える内容になっています。例えば、沖縄の良さとして語られる「ゆい(結) まーる(沖縄に残る相互扶助の文化)」ですが、裏返してみると貧困があるからゆいまるが残っていない、とも言えます。助け合わなきゃ生きていけない、という状況にさせられてしまっているわけですね。

**小松** なるほど。そもそも、沖縄における子どもの貧困に焦点を当てた白書をつくることになったきっかけを教えてください。

**山野** 元々、沖縄は経済的に厳しい状況でした。全国の貧困率は7人に1人の割合ですが、沖縄では実際どうなのか、賃金から計算してみると3〜4割と推定されました。沖縄大学の元学長・加藤彰彦(ペンネーム・野本三吉)さんがきちんとした数字が必要と考え沖縄での貧困調査を提案し、当時の翁長知事はじめ県庁も乗り気になり、調査が開始されました。2015年の第一回調査では、貧困率が29.9%とい

う衝撃的な結果が出て、子どもの貧困白書の制作につながりました。沖縄は琉球新報や沖縄タイムスなど地方紙が強く、新聞が協力しこの事実を取り上げたことが大きく影響しました。その後、沖縄県による子ども調査は毎年行われています。

## 27年間の意味

**山野** 戦後の歴史の中で培われてきた内地の豊かさは高度経済成長によるものが大きかったと思います。大企業を中心に組合が年功序列を維持し、子育て世帯の生活を支えていた。しかし、沖縄ではアメリカの占領下にあった27年間高度成長期そのものがなかった。戦後の荒廃のものが、沖縄戦のトラウマ、といったことに焦点が当てられる一方、占領期の27年間、沖縄の経済は止まったままだったという事実には私たちが気づかなかつたのではないのでしょうか。

**小松** 本土の経済成長の恩恵が沖縄には全く及ばなかつた、ということですね。

**山野** そうですね。占領期に外国資本が入ろうとしたが、自民党が阻止した、という事実もあります。返還時のドルショック(それまで1ドル360円だった為替レートが1ドル300円になってしまい、巨額の損失が出た)、

オイルショックなども沖縄経済に大きなダメージを与えました。

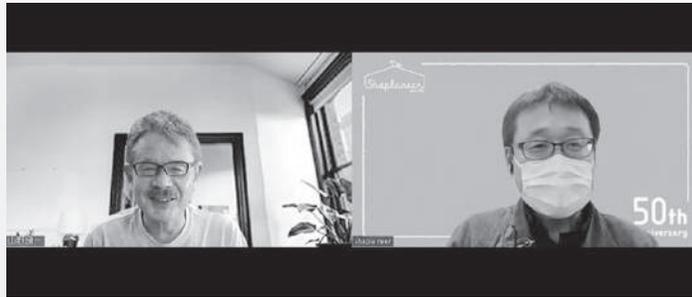
ちなみに、平均賃金をみると沖縄よりも低い県はあります。

しかし家計を支える男性の正規雇用の賃金は沖縄が一番低く、子育てが大変になっている。現在日本では非正規雇用の問題が大きく取り上げられています

が、沖縄では非正規雇用だけが問題ではありません。ちなみに女性の賃金はいくつかの県よりも高くなっています。女性の正規雇用は観光業を中心に増えています。新型コロナウイルスの感染拡大により、不安定な状況は明確になりました。

## 基地が沖縄の経済を止めている

**小松** 山野さんが最近書かれた論文を拝見した



のですが、子どもの貧困と基地の問題、社会的ネットワークなどの関連について述べられていますね。

**山野** 私が伝えたいのは、基地への依存と経済の問題です。普天間基地や嘉手納基地などが人口密集地にあります。そんなところで騒音や落下事故などが起きているわけです。こうした人口密集地にある基地の一部を米軍から取り返して再開発するというケースが出てきています。そうしたところは経済効果がとても高い。つまり、沖縄の経済発展を基地が止めてしまっているという論理が成り立ちます。

**小松** せっかく再開発して経済効果を出せても、それが本土の大企業に吸い取られてしまう、ということも起きているのではないですか。

**山野** そうですね。沖縄は産業別にみると建設業が多いのですが、国の事業を請け負うのはほとんどがゼネコンなどの大手で、地元の建設業者が潤うことはあまりないと思います。なので、建設業で働く人の賃金も低いままで。また、低所得の人の方が長時間働いている、という現状もあります。みな土曜日も働いている。観光業が盛んなことも影響していると思いますが、過労死ラインぎりぎり働いている人も多い。三六協定を守れていない企業も多いのが現状で

す。長期の占領下にあつて、労働組合が賃金闘争よりも平和運動、反戦運動にそのエネルギーを集中してきた。そのようにさまざまな要因がないまぜになって今の状況をつくっているのです。

ところで、ゆいまるには良い面、悪い面いろいろあると思います。ウチナンチュは結束が固い。今の学生たちの親や祖父母の世代には食べるために本土へ出稼ぎに行き、いじめられて帰って来た人が多いですね。親戚が集まって話をする、必ずそういう人がいるわけです。そうすると、そういう話を聞いて育った若者は「先生、東京って怖いところなんでしょ?」「行きたくない」となるわけです。実際に差別はあつて、本土の人の中には沖縄を植民地だと思つていた人も少なからずいました。差別してもいい人たちだと。

## いろんなことがつながっている

**小松** 貧困の問題に戻って、山野さんが伝えたい点はほかにありますか。

**山野** いろんなことがつながっている、ということですね。貧困だけを取り上げて解決しようとしても難しい。一つは所得の問題。一緒に研究をしている琉球大学の二宮元先生が言っていることですが、沖縄ほど最低賃金が効果を上げる

50周年記念グッズ  
限定発売開始!

水戸岡鋭治さんデザインのジュートバッグが登場!

多くの人に親しまれるクルーズトレイン「ななつ星」をはじめとした、斬新で魅力あふれる列車のデザインで大きな功績を残されてきた水戸岡鋭治さんに、クラフトリンクのジュートバッグをデザインしていただきました!遊び心のあるモザイク柄は、誰にでも似合う懐かしくて新しいパターンです。

水戸岡さんは、ご家族ともにステイナブル生活でのご寄付やクラフトリンク商品の購入などを通じシャプラーニールを支援くださっていたこと、またかねてより公共デザインで市民社会へ多くの貢献をされてきたことで、市民活動やシャプラーニールの理念に深く共感してくださり、今回の記念グッズ制作企画にご協力いただきました。

ジュート(黄麻)とはバングラデシュの特産物。燃やしても有毒ガスが出ず、土に埋めてもバクテリアによって分解されて自然に還る環境にやさしい自然素材です。持ち手はジュートコットンと肌触りもよく、軽くて丈夫な人気のバッグです。



持ち手には  
同じ柄の布で作ったリボン  
(着脱可能)が付きます。

現在都内の池袋周辺を走る「池バス」のシートにもあしらわれている水戸岡さんを代表するテキスタイル柄。モダンでカワイイデザインが特別なバッグに!

50周年記念 水戸岡鋭治デザインジュートバッグ

価格:1,900円(税込) サイズ:横40cm 縦30cm マチ10cm 持ち手50cm

水戸岡 鋭治(みとおかえいじ)

イラストレーター、デザイナー

1947年岡山県出身。建築・鉄道車両・グラフィック・プロダクトなどさまざまなジャンルのデザインを手がける。なかでもJR九州の駅舎、車両のデザインは、鉄道ファンの枠を越え広く注目を集め、ブルネル賞、毎日デザイン賞、菊池寛賞を受賞。主なデザイン作品に、JR九州の新幹線800系、クルーズトレイン「ななつ星in九州」、西九州新幹線N700S「かもめ」等。



撮影/白鳥 真太郎

クラフトリンクでは50周年記念グッズとして、ほかにエイブルアート・カンパニーの作家・佐々木 英明さん(障害者芸術活動支援センター)描きおろしのイラストのジュートバッグ、思わず笑顔になってしまうビッグサイズのネパールの雪男「イエティ」のマスコット、団体の新しいロゴをプリントしたドリップバック珈琲を数量限定で発売いたします!

50周年記念グッズの詳細は会報に同封のちらし、またはオンラインショップをご覧ください。  
オンラインショップはこちら <https://craftlink.shop/>



沖縄の良さを伝えたい

県はほかがない。最低賃金が100円上がればかなり貧困率が改善すると考えられています。もう一点、ストックの問題があります。安定的な労働がなく、貯蓄が少ない。沖縄県は持ち家率が最低です。ストックをどう増やすか、ということを考えなければなりません。あとは、保育に問題が大きい。待機児童率は極端に高いし、無認可保育所が多いのが沖縄の特徴です。学校の教育費もそうだし、就学援助も含めて、子どもたちを守るためには所得の問題だけではなく福祉政策が必要だと思えます。

小松 本土復帰50周年にあたって、感じることを考えることがあれば聞かせてください。

山野 そもそも今の子どもたちは50年前のことを知らない世代です。だからこそ今、50年間を振り返る必要があると考えて本を企画しました。沖縄の良さを伝えつつ検証すべきだと思います。貧困の問題を自分自身が考える、というのは沖縄県民のすごいところだと思うんです。親戚の中には必ず基地で働いている人がいるわけですが、それでも基地はいらない、辺野古の青い海を守りたいということをきちんと伝えるのがすごいなあ、と思うわけです。貧困問題を



山野 良一(やまの りょういち)

沖縄大学人文学部福祉文化学科教授。専門子どもの福祉。職歴として、神奈川県児童相談所児童福祉司等を経験。社会的活動として、現在「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク世話人。著書に『子どもに貧困を押しつける国・日本』(光文社新書)などがある。元シャプラーニール評議員。

地元の新聞がちゃんと取り上げるのも、読者である県民が興味関心を持つからです。日本政府や内地の人はそういうことをきちんと理解していないのではないのでしょうか。

小松 最後に会報の読者へ何かメッセージがあればお願いします。

山野 沖縄に関心を持ってほしいし、知ってほしいです。内地にはない良さがあり、同時に課題もあります。沖縄県内でもやんばるへの田舎としての偏見や差別もある。いろんな問題が重なっているところを見ていただきたい。そして沖縄のことを抜きにして平和を考えることはできないと思います。海外の子どもたちのことも支えなければならぬと同時に、沖縄の人たちの気持ちも支えてもらえればと思います。

まとめ

身近に感じた課題を明らかにするために調査を行い、それを自分たちだけで解決するのではなく行政や市民いろんなひとたちがつなげて解決していこうという大仲さんの姿勢に、私たちシャプラーニールの取り組みとの共通点を感じました。そして本土復帰50周年の話を向けた時、「自分は表面だけのウチナーンチュウなのではないか」と言った彼女の言葉は、とても意外であり、でも自分に置き換えてみれば当たり前の感覚なのかもしれない、と思いました。

子どもの貧困問題に長く関わってきた山野さんの言葉は一つひとつ重みと説得力があり、私が想像もしていなかった沖縄の現状を伝えてくれました。子どもの問題を考えるうえでもいろいろなことがつながっていて、「貧困」の視点だけでは解決できないのだ、ということに改めて認識しました。

お二人別々にお話を伺ったのですが、共通していたのは、ゆんたく、ゆいまいりという沖縄の言葉が自然と会話に出てくることに若干の戸惑いと温かさを感じたこと、そして「沖縄のことを知ってほしい、一緒に考えよう」というメッセージでした。「啐啄同時」、沖縄のこと、平和のことをぜひ皆さんと一緒に考えたいと思います。